

浦賀文化

平成17(2005)年11月1日

第4号

Email: uragabunka@yahoo.co.jp
ホームページ開設準備中

編集・発行: 横須賀市浦賀文化センター 〒239-0822 横須賀市浦賀町7-1 電話&ファクス 046-842-4121 (隔月発行)

変わりゆく浦賀ドック

いま、三郎助は何を想う



今原邦彦さん

浦賀ドックは、中島三郎助のために造られた造船所と言えます。函館で戦死した三郎助父子を悼み、明治二十四(1891)年、浦賀愛宕山に招魂碑が建立されました。その除幕式に列席した中央気象台長荒井郁之助が、時の農商務大臣榎本武揚に我が国初の洋式軍艦「鳳凰丸」を建造した三郎助を顕彰するために造船所の創設を提唱したのです。

榎本も荒井も三郎助とともに函館戦争を戦った幕府海軍の同志で蝦夷共和国の重鎮でした。その中で、三郎助父子は函館千代ヶ岡で壮絶な討死を遂げ、榎本と荒井は降伏します。生き残った一人は、申し訳なく思い、いつか三郎助のために何かをしたいと考えていたのかもしれない。

実際に、榎本は三郎助の遺児與會八(後に海軍中将)と六子の面倒をみています。榎本に三郎助の遺児の世話を依頼したのは、木戸孝允(桂小五郎)です。

上宮田の長州陣屋にいた22歳の木戸は、浦賀の三郎助宅に寄宿し造船を学んでいました。木戸は造船を通して海軍を知り、海軍を通して世界を知ったといわれ、木戸の政治的開眼は浦賀

だったのです。明治九(1876)年、鹿兒島の対応に忙殺されていた木戸のもとに三郎助の妻錫が二人の子を連れ現れます。極度の疲労で病に冒されつつあった木戸は、直ちに榎本と大島圭介に與會八の世話を依頼し、六子は自ら引き取り(裏面につづく)

ハーモニカサークル ビバ・アルモニカ

唐沢健三

浦賀に響く ハーモニカの音色

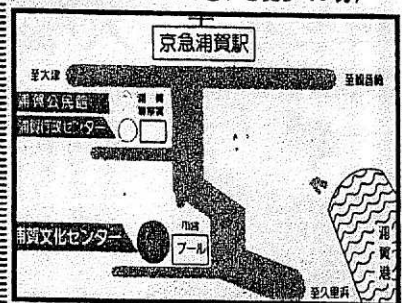
平成六年、浦賀公民館で「エンジョイ・ハーモニカ」講座が開講された。子供の頃、兄貴たちの吹くハーモニカの音色に魅せられて、母親にねだりハーモニカは入手したものの、戦時下の空襲で我が家と共に焼失してしまいました。

以来ハーモニカに縁もなく、社会人としての定年も過ぎて、生きがい求めていた矢先のこと早速受講した。講座は全8回、開設の主題は「ハーモニカに親しみ工夫して演奏すること」により、音楽に楽しみをもつ」と記されていた。

ハーモニカに対する基礎知識はなく、ハーモニカの音符が数字符であることをはじめて知った。受講中は無我夢中で、吹奏を楽しむ余裕とて無かった。

一に練習、二に練習、三四が無くて五に練習の日に終わった。そうしていつのまにか、「一(ハーモニカ)を以てこれを貫くぞ」との思いに変わり楽しくなっていた。

講習終了後にハーモニカ愛好者が相集い、リーダーの斎藤氏の発案で、自主サークル「ビバ・アルモニカ」(ハーモニカ万歳!)を結成して「浦賀公民館友の会」に入会した。以来、友の会が主催する「文化祭」、実行委員会が主催する「浦賀ジョイントコンサート」に参加している。また浦賀社会福祉協議会の「芸能ボランティア」としてハーモニカを演奏して多くの皆様から人生を学び、元気を頂戴している。ハーモニカを通じて音楽が人類普通の共通語と知り、その道が永遠なることも体得して演奏を楽しんでいる。過日、浦賀公民館講座「孔子に学ぶ」を受講した。その講義の一節「夫子の道は忠恕のみ」の教えに感銘、先述した「一を以てこれを貫くぞ」の思いに意を強くした。



所在地: 横須賀市浦賀町7-1
電話: 046-842-4121
ファクス: 046-842-4121

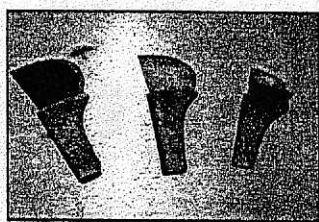
町内の歴史

東浦賀一丁目(大ヶ谷)

一語る人 斎藤良幸さん(三浦屋)

昔の大ヶ谷には、たくさんのお寺があった。寺の下: 畑中・藤ヶ坂・板場・中奥・奥・蛸ヶ浦などに分かれていた。中奥にある三浦屋さんは、常福寺の過去帳によると、すでにペリー来航時には仕事を始めていたらしい。その頃は、職人が着る足袋や股引・腹掛、祭り用の鯉口・半股引を作っていた。昭和に入ると、学校の体操着や体操帽、会社の職工さんの作業服(かば色の詰め襟)を納めていた。またこの頃、東京日本橋にも

湊の歴史とともに歩んできた



研ぎが命の使い込んだクリ包丁

店を出していた記録が版木として残っている。戦後、ドックの中で火事があった時には、重いシンガミシンを運び出したこともあった。その後は軍艦の天幕・機器・帆布製品などの仕事をしていた。裁断時にクリ包丁(栗の形をしていて刃のように切ることから)で十センチ程に重ねた布を、定規も当てずに目見当で切ってしまう。研ぎが命の仕事とはいえず、実際にその正確さには驚いた。

今は切りくずをゴミにしているが、五十年前は落綿といって、繊維の二流品を作るために東京の問題屋が集めて来ていた。現在は職人も減り、かえって仕事が忙しいと話していた。

(小倉・長島)

東西風

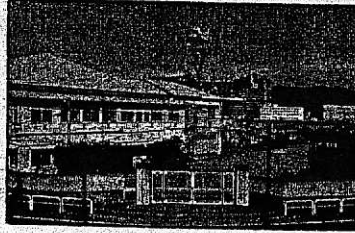
浦賀という地名は、元来久比里の平作川河口にあった地名で、この地形が海が川のように川が海のように見えるところから「浦川」と呼ばれていたのが本当の地名であった。それが戦国時代に房総半島の里見氏の海上からの攻撃に、手をやいた後北条氏が房総半島を見張るために、現在の浦賀港の入り口にある明神山の山頂に城を築き、港には後北条氏にとって、はじめての水軍が置かれた。この時「海をよるこぶ」ところという願望をこめてであろうか、「浦賀」の文字が使用されるようになった。今、浦賀の海はよるこばれているであろうか。(山本)

★おしらせ
浦賀文化は今号から隔月発行になります。ご了承ください。

いま、三郎助は 何を想う

(二面からのつづき)ます。翌年、木戸が45歳の若さで亡くなると六子も榎本に庇護されます。

退官した荒井は、造船所の建設に向け全力を注ぎます。榎本およびその元部下であった通信省官船局長塚原周造と計らい会社設立に邁進します。その後、浦賀の豪商臼井儀兵衛や緒明造船所の緒明菊三郎など三郎助と親交のあった人達が賛同し、実業家浅野総一郎



現在、工事中の浦賀ドック

の協力を得て明治二十九年(1896)年、浦賀船渠株式会社を設立しました。

荒井は会社設立の目的が、つくと監督役に退き、初代社長を塚原に譲ります。その後、浦賀船渠は幾つかの苦難を乗り越え日本の発展とともに成長し、鳳凰丸を建造した三郎助の遺志を受け継いだのか、駆逐艦の建造では、我が国屈指の造船所になります。また、昭和二(1927)年竣工の国会議事堂の鉄骨工事は、当造船所の施工です。

そして、住友重機械工業浦賀工場となっても練習帆船日本丸を建造するなど独自の世界を築いてきました。が、平成十三年(2001)年にこの造船所は閉鎖されました。

今、三郎助をはじめ先人達は、この残念な事実をどのように想っているのでしょうか。(元中央図書館館長)

笑話一題

先日、ちよつと変わった歴史ツアーに参加しました。浦賀港の岸壁から突然「黒船が来たぞ」と叫び声が聞こえたと聞いたら、一五〇年前にタイムスリップしたような村人が数人現れました。突然の出来事に、釣り人もお散歩途中の人々も思わずびびり...

案内

●歴史講座 浦賀の歴史

浦賀文化センターでは毎年恒例の歴史講座を11月開講します。開国の街・浦賀の歴史を渡りにスポットを当て学びます。講師は当館スパーバイザー山本詔一氏です。11月21、28、12月5、12、19日の毎週月曜日、午後一時半～三時半、全5回、定員50名、参加費無料。

場所・浦賀文化センター 第3・4学習室。興味のある方、ぜひこの機会にご参加ください。申し込みは往復ハガキに住所・氏名・電話番号・講座名を記入の上、浦賀公民館(〒239-0822 横須賀市浦賀町5-3)へ。また浦賀公民館へ直接来館される場合は返信用ハガキを持参ください。11月14日(月)締め切りです。

●浦賀公民館 文化祭

11月17日(土)～20日(日)の4日間、浦賀公民館で作品展や即売会、ハーモニカ演奏、喫茶コーナーなどの催しがあります。

●「浦賀志縁」勉強会

当館では浦賀志縁編纂に向けて毎月、勉強会を開いています。次回は11月9日(水)の午後一時半から四時、田中町内会館にて。興味のある方はぜひご参加ください。詳細は当館まで。

展示室の紹介

●鳳凰丸の模型(50分の1)

日本で初めて建造された大型軍艦「鳳凰丸」の模型はキットから作られたのではなく、一つ一つのパーツから手作りという力作です。この模型は、船の科学館と当センターにしかないそうです。他に「威風丸」、「サスケハナ号」の模型もあります。この三艘はすべて縮尺が違います。目で見ると横須賀・三浦の100年

蔵書



浦賀文化センターでは、浦賀や横須賀の歴史に関する資料や書籍を収蔵しています。今回は、その中の一冊を紹介いたします。「目で見る横須賀・三浦の100年」という写真集です。明治から大正昭和戦前、昭和戦後と時代別にまとめられており、時代の流れがわかりやすくなっています。宮下や谷戸、鴨居、浦賀小学校や浦賀町役場など、浦賀の風景も見ることが出来ます。「昔は、こんなだったのかあ」と横須賀の歴史を感じたり、懐かしかったり、幅広い年代の方々に見ていただけたらと思います。(中井)

歴史話の座・浦賀

郷土史家 山本詔一



松平定信が行った寛政の改革以来、村は飢饉などの非常時に対応する夫喰米を蓄えておくことになつてきた。東浦賀の町は、米蔵がないことなどから、この夫喰米を蓄えて置く分をお金に替えて商人に預けておいた。

しかも、そのお金を天災や不漁など村の中でお金がないときに貸し出していたが、貸付金の井済が停滞しがちで不安なので、奉行所でやっている貸付金と同様の扱いをしてくれるように訴え出した。

これに対して奉行所は、文久二年(1862)二月、年一割の利子をつける「貯夫喰米代貸付金」という名目で貸し付け、八年後元金が千両を越えたら、郷蔵(米蔵)を建てることと毎年十一月に奉行所が会計検査をする条件で許可を出した。

しかし同年四月、東西浦賀の村役人が奉行所に呼ばれ、「夫喰米は米で蓄え置くはずなのに、お金で貯えておいては非常事態のときに本当に対応できるのだから、米で蓄えてあげば安心であろう。」と言われた。

さらに「米を置いておく所がないというなら、信頼できる商人に預かってもらえばよいのではないか」と指示があった。

それから一ヶ月後、奉行所は貸付金を中止させ、元金は一番組商人と呼ばれた大店の組合に預けられた。

郷蔵を建てることを目標に

夫喰米制度

④ その上で、元金の六百両余りを商人に預かってもらう米の詰め替えの代金や郷蔵を建設する資金をブラスするために、来年から商人だけでなく村人も一丸となって貯蓄することを提案した。提案通りに行えば十年ほどで、元金が九百両余りになり、この資金で郷蔵を建て、米を置くことができるようになるという細かな指示が出された。村はこの提案を受け入れて、積み立てをすることを誓約した請書を奉行所に提出した。

どうして奉行所が貸付金を中止し、村へ戻したのかはつきりしたことはわかっていないが、この年の一月、将軍が幕府の歴史上はじめて船で上洛することになり、その準備に追われていた。実際には船での上洛は中止になったが、ほつとする間もなく三月には、前年の八月に起こった「生麦事件」の交渉によつては、江戸湾が戦場となりうる状況であった。となれば最前線基地が浦賀奉行所となることは必然なことであった。ペリ―来航の時よりも奉行所内の緊張感が高まっており、貸付金のような民間でできることは民間に、という考え方が出てきたのかもしれない。



松平定信30歳の自画像 「週刊朝日百科 日本の歴史84」より